本学理学療法学部生の東京オリンピック・パラリンピックボランティア参加の傾向

——東京圏と地方キャンパスの違い——

Physical Therapy Students' Tendency to Participate in Volunteer Activities for the Tokyo Olympic/Paralympic Games: A Comparison between Tokyo and a Rural Area

佐藤 珠江^{1,2)} 小野田 公²⁾ 久保 晃²⁾ 丸山 仁司³⁾

TAMAE SATO, RPT, MS^{1,2)}, Ko ONODA, RPT, PhD²⁾, AKIRA KUBO, RPT, PhD²⁾, HITOSHI MARUYAMA, RPT, PhD³⁾

¹⁾ Division of Physical Therapy, Doctoral Program in Health Sciences, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare: 2600-1 Kitakanemaru, Ohtawara-shi, Tochigi 324-8501, Japan
TEL +81 287-24-3018 E-mail: ts@iuhw.ac.jp

²⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Sciences, International University of Health and Welfare

³⁾ Graduate School of International University of Health and Welfare

Rigakuryoho Kagaku 34(5): 635-640, 2019. Submitted Mar. 29, 2019. Accepted May 8, 2019.

ABSTRACT: [Purpose] To clarify differences in physical therapy students' tendency to participate in volunteer activities for the Tokyo Olympic/Paralympic Games, such as attitudes toward and reasons for participating, between Tokyo and a rural area. [Participants and Methods] A questionnaire survey was conducted, involving students in their first to third year at the Department of Physical Therapy, belonging to 2 different campuses of the study university as of FY2018: Narita (Tokyo): 116 males and 101 females, a total of 217; and Otawara (rural area): 142 males and 108 females, a total of 250. [Results] In Tokyo and the rural area, the rates of answering "Participating" in volunteer activities were 14.3 and 11.3%, respectively. The results also revealed differences between the 2 areas in students' tendency regarding achievements obtained by participating in volunteer activities. [Conclusion] The rate of participating in volunteer activities was similarly around 10% in Tokyo and the rural area, but the primary anxiety factor varied between them, as it was <sudden changes in the class schedule at university during this period> in the former and <language> in the latter. Furthermore, there were significant differences in expected achievements between the 2 areas.

Key words: Tokyo Olympic/Paralympic Games 2020, physical therapy student, volunteer activity

要旨:〔目的〕理学療法学部生のオリンピック・パラリンピックに関するボランティアへの参加や理由等の傾向を、東京圏と地方圏で違いを明らかにすることである。〔対象と方法〕2018年度に本学理学療法学科に在籍する東京圏群（成田キャンパス）1～3年生217名（男性116名、女性101名）、地方群（大田原キャンパス）1～3年生250名（男性142名、女性108名）を対象に質問紙調査を実施した。〔結果〕東京圏群ではボランティアに「参加する」が14.3%、地方群では11.3%であった。ボランティアへの参加により得られる事柄について東京圏群と地方群で傾向の違いがみられた。〔結語〕東京圏群、地方群とも約10%がボランティアに参加予定であるが、不安要素として地方群では「言語」、東京圏群では「大学の授業が入らないか」であった。得られる事柄について東京圏群と地方群で有意差が認められた。

キーワード: 東京オリンピック・パラリンピック2020, 理学療法学部生, ボランティア

¹⁾ 国際医療福祉大学大学院博士課程 医療福祉学専攻 保健医療学専攻 理学療法学分野：栃木県大田原市北金丸2600-1（〒324-8501）TEL 0287-24-3018

²⁾ 国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科

³⁾ 国際医療福祉大学大学院

I. はじめに

2020年に東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会）が開催される。これに伴い都市ボランティア3万人、大会ボランティア8万人が募集された。都市ボランティアとは、東京都が運営主体であり、空港・主要駅・観光地・競技会場の最寄り駅周辺を活動場所とし、国内外からの旅行者に対する観光・交通案内や観客を競技会場まで案内する運営のサポートを行う。一方の大会ボランティアとは、競技会場や選手村等の大会関係施設で競技運営サポートやメディアサポート、観客サービスを行うボランティアであり、東京2020組織委員会が運営主体である¹⁾。両ボランティアとも応募期間は2018年9月26日～12月21日までであり、大会ボランティアは8万人の応募に対し、20万人を超える応募があり、多くの人がボランティアに関心を寄せていたことがわかる¹⁾。応募条件は、2002年4月1日以前に生まれた方、活動期間中に日本国籍または日本に滞在する在留資格を有する方であった。

東京で2度目となるオリンピック・パラリンピックの開催には、世界200以上の国と地域から選手や大会関係者、観客が日本を訪れるとされ、東京2020大会にボランティアとして参加することは大会を盛り上げる一翼を担う存在となる¹⁾。

東京2020組織委員会では「オリンピック・パラリンピック競技に関する基本的な知識がある方」や「スポーツボランティアをはじめとするボランティア経験がある方」に積極的に応募して欲しいと明記している¹⁾。本学の理学療法学部生は、スポーツ経験者が多く、将来は理学療法士としてスポーツに携わりたいと希望する学生やボランティア経験がある学生も在学しており、東京2020大会ボランティアに興味を示す学生が存在すると考えられる。大会ボランティアの具体的な活動内容として「案内」、「競技」、「移動サポート」、「アテンド」、「運営サポート」、「ヘルスケア」、「テクノロジー」、「メディア」、「式典」の9つの分野があり¹⁾、理学療法学生にとってボランティアに参加することはトップアスリートに携わることのできる貴重な経験となろう。一方で東京2020大会ボランティアに参加するにあたり、10日以上参加や、活動期間中における宿泊費や交通費などは自己負担であり、課題も山積している。

そこで、本研究では理学療法学部生の東京2020大会に関するボランティアへの参加希望の有無やその理由等、傾向を明らかにすることと、東京圏のキャンパスと地方キャンパスにどのような傾向の違いが存在するのかを明らかにすることを目的とした。

II. 対象と方法

1. 対象

本大学の2キャンパス（大田原、成田）の理学療法学科に在籍する学部生467名、大田原キャンパス250名（男性142名、女性108名）、成田キャンパス217名（男性116名、女性101名）を対象とした。アンケートのはじめに本研究への参加について同意の有無を問い、同意すると回答して提出した学生とした。大田原キャンパスは東京から新幹線で1時間の場所に位置し、約4000人の学生が在学している。また地域の方々とともに数々のイベントも行っている。成田キャンパスは2015年に新設したキャンパスで、駅の目の前に位置し、国際交流を積極的に行っている。本研究は、国際医療福祉大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号：18-10-109）。

2. 方法

方法は質問紙調査で、質問は全11項目で構成した。11項目中5項目は全員を対象としたもの、5項目は東京2020大会ボランティアに参加予定の学生に対して、1項目は参加しない学生に対して実施した。本調査は2018年12月に行った。

全員を対象とした質問の内容は、①性別、②在籍年、③東京2020大会ボランティア参加予定、④オリンピック・パラリンピックに対する興味の有無、⑤オリンピック・パラリンピックボランティアに参加したら得られると思うことの計5項目であった。設問③、④、⑤に対する回答の選択肢は、③東京オリンピック・パラリンピックボランティアに「参加する」、「参加しない」、「わからない」、④オリンピック・パラリンピックに興味の有無「両方に興味がある」、「オリンピックに興味がある」、「パラリンピックに興味がある」、「どちらにも興味はない」、「わからない」、⑤オリンピック・パラリンピックボランティアに参加したら得られると思うこと「やりがい」、「思い出」、「将来の展望」、「語学力」、「その他」とした。それぞれ該当する回答カテゴリーを1つ選択させた。

参加予定の学生を対象とした質問は、⑥どの部門で参加するか、⑦東京2020大会ボランティアに参加する理由、⑧参加するにあたり不安なこと、⑨参加しやすくするための大学への要望、⑩ボランティアに参加したいと思う理由の5項目であり、参加しない学生を対象とした質問は、⑪参加しない理由について調査した。

参加予定の学生に対する質問⑩のみ該当する回答カテゴリーを1つ選択させ、その他⑥～⑨は複数回答可能とした。⑥どの部門で参加するかについては、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が実際に応募していた部門を選択肢とした¹⁾。⑦東京

2020 大会ボランティアに参加する理由の回答選択肢は、「スポーツボランティアに興味があった」、「日本でのオリンピックを盛り上げたい」、「将来スポーツに従事したい」、「自分の力を試したい（語学や知識など）」、「その他」、⑧参加するにあたり不安なことは「言語」、「ボランティアに参加するための費用」、「大学の授業や補講が入らないかどうか」、「体調」、「その他」、⑨参加しやすくするための大学への要望は、「授業や実習の日程などを考慮してほしい」、「参加に必要な知識・技術に関する事前トレーニング（授業）をしてほしい」、「参加したことに対する評価をしてほしい」、「宿泊費や交通費など補助をしてほしい」、「その他」、⑩ボランティアに参加したいと思う理由は、「自分の成長のため」、「新しい人との出会いを得たい」、「授業では得られないものを学びたい」、「物の見方や考え方を広げたい」、「その他」を設けた。

参加しない学生を対象とした 1 項目は、⑪参加しない理由について「興味がない」、「スケジュール的に難しい（実習などの大学のイベントがある等）」、「英語ができない」、「金銭的な負担が大きい」、「その他」とし複数回答可能とした。

統計解析は、各質問項目より回答数を合計し、回答数からの割合を算出し、地方群、東京圏群の 2 群に分け質問ごとに χ^2 検定を行った。東京圏群とは、国土交通省の首都圏整備計画²⁾で用いられている区間とし東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、千葉県の 1 都 3 県、それ以外を地方圏と定義した。統計ソフトは IBM SPSS Statistics24.0 を使用し、有意水準は 5%とした。

III. 結 果

対象者の属性は表 1 に、質問紙調査結果を表 2 に示す。東京 2020 大会ボランティアに「参加する」と回答した学生は、地方群では 28 名 (11.3%)、東京圏群では 31 名 (14.3%)、「参加しない」と回答した学生は、地方群 101 名 (40.7%)、東京圏群 65 名 (30.0%)、「わからない」と回答した学生は、地方群 119 名 (48.0%)、東京圏群

121 名 (55.8%) であった。「参加する部門」は、両群とも「競技」を希望する学生が最も多く、地方群 16 名 (26.2%)、東京圏群 26 名 (25.3%) であった。「参加する理由」は、「スポーツボランティアに興味があった」が最も多く地方群 20 名 (37.7%)、東京圏群 28 名 (43.1%) であった。「参加するにあたり不安なこと」は、地方群は「言語」が 18 名 (45.0%) だったのに対し、東京圏群は「大学の授業や講義が入らないかどうか」が 23 名 (39.0%) であり異なった結果が得られた。「参加しやすくするための大学への要望」は、地方圏、東京圏ともに「授業や実習の日程などを考慮して欲しい」が最も多く、それぞれ 20 名 (37.0%)、26 名 (37.7%) であった。「ボランティアに参加したいと思う理由」は、地方圏は「自分の成長のため」が 20 名 (35.1%) であり、東京圏は「授業では得られないものを学びたい」が 29 名 (32.2%) と異なった結果が得られた。

一方「参加しない」理由は、地方圏では「スケジュール的に難しい」が 47 名 (29.7%)、「金銭的な負担が大きい」が 46 名 (29.1%) であり、東京圏も同じような傾向を示し、「スケジュール的に難しい」が 31 名 (29.8%)、「金銭的な負担が大きい」が 29 名 (27.9%) であった。

全員に対して行った質問「オリンピック・パラリンピックに興味はありますか」の問に対し、「両方に興味がある」と回答した学生は、地方群は 168 名 (69.1%)、東京圏群は 148 名 (68.2%)、「オリンピックに興味がある」と回答した学生は、地方群 47 名 (19.3%)、東京圏群 42 名 (19.4%)、「パラリンピックに興味がある」と回答した学生は、地方群 4 名 (1.6%)、東京圏群 3 名 (1.4%)、「どちらにも興味がない」と回答した学生は、地方群 15 名 (6.2%)、東京圏群 12 名 (5.5%)、「わからない」が地方圏で 9 名 (3.7%)、東京圏 12 名 (5.5%) であった。「オリンピック・パラリンピックボランティアに参加したら得られると思うこと」について、地方圏は「思い出」が 98 名 (33.2%)、東京圏群は「語学力」が 76 名 (16.7%) で多い傾向であった。「オリンピック・パラリンピックボランティアに参加したら得られると思うこと」のみ有意差が認められた。

IV. 考 察

本研究の結果から、東京 2020 大会に興味を持つ学生が地方群・東京圏群ともに約 70%存在したが、ボランティアに参加する学生は地方群・東京圏群ともに 10%程度しかいなかったことが明らかとなった。

東京 2020 大会ボランティアに参加する理由として地方群、東京圏群ともに「スポーツボランティアに興味があった」が最も多く、「将来スポーツに従事したい」という回答も多く得られた。一方で東京 2020 大会ボランティア参加のための不安要素として、東京圏群は「大学

表 1 対象者の属性

	地方群 (n = 250)	東京圏群 (n = 217)
性別 (名)		
男性	142	116
女性	108	101
在籍学年 (名)		
1 年生	85	81
2 年生	92	69
3 年生	72	67

表2 アンケート集計結果（実数）

	地方群 (n = 250)	東京圏群 (n = 217)	p 値
東京 2020 大会ボランティアに参加予定ですか			
参加する	28	31	0.05
参加しない	101	65	
わからない	119	121	
参加するを選択した学生を対象とした質問 どの部門で参加しますか（複数回答可）			
指定なし	7	4	0.59
案内	5	13	
競技	16	23	
移動サポート	7	13	
アテンド	2	3	
運営サポート	6	7	
ヘルスケア	13	14	
テクノロジー	0	3	
メディア	1	3	
式典	4	8	
参加する理由			
スポーツボランティアに興味があった	20	28	0.95
日本でのオリンピックを盛り上げたい	10	11	
将来スポーツに従事したい	15	17	
自分の力を試したい（語学や知識）	8	9	
その他	0	0	
参加するにあたり不安なこと			
言語	18	20	0.19
ボランティアに参加するための費用	13	15	
大学の授業や補講が入らないかどうか	8	23	
体調	0	1	
その他	1	0	
参加しやすくするための大学への要望			
授業や実習の日程などを考慮してほしい	20	26	0.75
参加に必要な知識・技能に関する事前トレーニング（授業）をしてほしい	15	17	
参加したことに対する評価をして欲しい	4	8	
宿泊や交通費など補助してほしい	14	18	
その他	1	0	
ボランティアに参加したいと思う理由			
自分の成長のため	20	23	0.12
新しい人との出会いを得たい	8	14	
授業では得られないものを学びたい	16	29	
物の見方や考え方を広げたい	10	24	
その他	3	0	
参加しないを選択した学生への質問			
参加しない理由			
興味がない	36	19	0.79
スケジュール的に難しい（実習など大学のイベント等がある）	47	31	
英語ができない	25	21	
金銭的負担が大きい	46	29	
その他	4	4	
全員を対象とした質問			
オリンピック・パラリンピックに興味があるか			
両方に興味がある	168	148	0.91
オリンピックに興味がある	47	42	
パラリンピックに興味がある	4	3	
どちらにも興味はない	15	12	
その他	9	12	
オリンピック・パラリンピックに参加したら何が得られると思うか			
やりがい	103	145	<0.05
思い出	98	126	
将来の展望（やりたいこと）	74	97	
語学力	15	76	
その他	5	10	

複数回答あり。

の授業や講義が入らないか」だったのに対し、地方群では「言語」であった。地方群では東京圏群に比較し、留学生の受け入れが少なく、外国語に触れる機会が少ないことが考えられる。東京 2020 大会ボランティアに応募するために必要な外国語のスキルについて明記している頁はないが、「英語、その他言語および手話のスキルを活かしたい方」に積極的に応募して欲しいと募集要項に記載されていることも、不安要素の一因になるのではないかと考える。また、「大学の授業や講義が入らないか」という不安に関して、東京 2020 大会組織委員会のボランティア戦略では、次世代を担う若い世代がボランティア活動を体験できるように国等と連携をし、試験日の配慮や大学生がボランティア活動に参加しやすくなるように働きかけるなどの取り組みを検討するとしており、本大学としても授業や実習スケジュールなどの日程について考慮し、参加しやすい環境づくりを行い、学生に対して早めに周知するなどの支援していく必要があると考える。

「東京 2020 大会ボランティアに参加しやすくなるために大学への要望」として「宿泊や交通費などを補助して欲しい」という回答が地方群で 25.9%、東京圏群で 26.1% 得られ、ボランティアに参加しない理由として「金銭的負担が大きい」が地方群で 29.1%、東京圏群で 27.9% であった。東京圏と地方圏では異なった傾向を示すと考えていたが、同じ傾向を示した。この理由として、東京圏として定義している成田キャンパスは、東京都心部から 70 km 程離れており、東京 2020 大会組織委員から配布される交通費相当（1000 円／日）の支給では補えないため、参加するほど出費がかさむことが考えられる。同様に地方群では、会場までの距離が遠く、東京圏以上に交通費がかかり、宿泊費も必要になることが予想され、何らかの金銭的援助または移動手段や宿泊場所の提供なども必要であると考えられる。

また、「参加に必要な知識・技術に関する事前トレーニング（授業）をしてほしい」という要望も両群とも 25% 程度あった。事前に必要な知識・技術の一つとして、ファーストエイドがある。ファーストエイドとは、「急な病気やけがをした人を助けるためにとる最初の行動」と Japan Resuscitation Council (JRC) 蘇生ガイドライン 2015³⁾ で定義されており、大会ボランティアの活動の一環である「医療サポート」で、けが人や急病人が出た場合に素早く対応を行う役割を担うため、早期からファーストエイドに対する知識を得る必要があるとされる。曽根ら⁴⁾ は、現場に居合わせる可能性の高いボランティアがファーストエイドを行える救急医療教育体制構築が重要だと報告している。本キャンパスの理学療法学生は入学直後にフレッシュマンセミナーを開催しており、1 年生全員で一次救命処置の講義および実技を行うプログラムを実施し、心肺蘇生法や自動体外除細動器

(Automated External Defibrillator: 以下、AED) の使用方法を学んでいる。また、本学の理学療法学生は 2 年生から救急医学の科目を選択し受講することが可能であり、救急医療に関する基礎知識の習得、救急蘇生法、AED の使用方法を習得することができるため、早期からファーストエイドに対する知識を得られる。しかし、東京 2020 大会ボランティアにファーストエイドの知識が必要であることについて、学生が認識している可能性が低いと考える。医療系大学として、スポーツに携わるボランティアとしてどのような知識が必要なのかを改めて学生に伝えていくことも必要であると考えられる。

東京 2020 大会ボランティアに参加することにより得られる事柄について、地方群は「思い出」、東京圏群は「語学力」であり、地方群である大田原キャンパス理学療法学科の教育目的の一つに人を深く思いやること「情意」があり、成田キャンパスでは国内外で活躍できる理学療法士の育成⁵⁾ であることから、キャンパスの特色が影響していると考えられる。東京 2020 大会オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は全国の 806 大学および短期大学との連携協定を結んでいる。本大学もその一校であり¹⁾、学生がボランティアに参加しやすい環境を整える支援をしていきたいと考える。例えば、不安要素として挙がっている「大学の授業や講義が入らないか」に対して、東京 2020 大会中の大学のスケジュールを事前に学生に提示する。他にも、ボランティアに参加を希望する学生を早めに把握し、実習期間と被らないように配慮をするなど学生に伝えていくことができる。また「言語」に対する不安の軽減として、ボランティアをする際に必要な英会話の勉強会を大学の語学教育と協力し、トレーニングをしてボランティアに参加できるように支援することなどができると考える。東京 2020 大会以外のボランティアに対して、本学には「IUHW ボランティアセンター」があり、ボランティア相談員やボランティアコーディネーターが常駐しており、ボランティア活動を行いやすい環境や機会を提供している。全 19 のボランティア団体があり、災害支援や障がい者・障がい児施設での活動、子供から高齢者まで幅広いボランティア活動を行っている。今後は障がい者スポーツやスポーツボランティアの活動も行えるように支援していきたいと考える。

学生がボランティア活動を行うことは学生自身がその活動から学びを得る体験学習であり、学生の自己形成やアイデンティティの確立、他者との共生能力の獲得⁶⁾ など、学生自身の成長を促す可能性があり、ボランティア活動は意義のあるものである。これにより本学の学生が東京 2020 大会への参加に必要な支援等を提案することにより、今後もより積極的にボランティアに参加できるような対策を講じる一助となると考える。

利益相反 本研究には開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会. <https://tokyo2020.org/jp/> (閲覧日: 2019年2月18日).
- 2) 国土交通省: 首都圏整備計画. <http://www.mlit.go.jp/common/001128802.pdf> (閲覧日: 2019年4月25日).
- 3) 一般社団法人日本蘇生協議会: 第7章ファーストエイド. JRCガイドライン2015オンライン版, 2015: 12. <https://www.japanresuscitationcouncil.org/wp-content/uploads/2016/04/046cde60f41eae569a6aac3edb80584b.pdf> (閲覧日: 2019年2月28日).
- 4) 曾根悦子, 田中秀治, 喜熨斗智也・他: 東京オリンピックに向けた救護ボランティアスタッフ育成プログラムの検討. 国士舘大学体育研究所報, 2017, 35: 101-107.
- 5) 国際医療福祉大学: 大田原キャンパス 教育研究上の目的. <https://otawara.iuhw.ac.jp/about/policy/index.html> (閲覧日: 2019年2月21日).
- 6) 黒沢幸子, 日高潤子, 張替裕子・他: 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長—その様相とキャリア教育の視点からの考察—. 目白大学心理学研究, 2008, 4: 11-23.